

巨人伝承―世界神話に見る暴力の起源―

篠田 知和基

自然の猛威に人間は巨大な神々の荒れ狂う様を想像した。最初の「神々」は暴力そのものだった。暴風や火山や怒濤に人は神そのものを見た。自然神話である。この神々は自然の猛威以外のものはあらわさず、人間的感情などもたなかつた⁽¹⁾。

自然神話のあとに人文神話が来て、自然にも人間的感情と行動が付与され、その自然の力を人間が制御するさまが、巨人との戦いで描かれる。巨大で獍猛な「自然の神々」が「巨人」と「人文神」に別れたのである。ゼウスとオリュンポスの神々が巨人と戦ったのが「ギガントマキア」として彫刻などに描かれる⁽²⁾。北欧でも巨人族と神々の戦いが最後のラグナレクの主題である。しかし神々すべてを人間よりおおきな巨大な体躯で想像する傾向も依然としてあり、巨人たちとゼウスもギガントマキアのフリーズなどでは体格に相違はみられない。北欧でも巨人族の娘ゲルダは豊穡の神フレイに請われて神々の園アスガルドに嫁入りするが、この夫婦に体格の違いがあつたという話はない。つまりフレイも巨人の娘とならんで遜色のない巨人だったことになる。一方、ギリシャの神々、なかでもゼウスは人間の女を次々に誘惑し子をはらませる。アングルの描いた「ゼウスとセメレー」

では、たしかにゼウスのほうがセメレーの倍くらいの寸法で描かれているが、たとえばデーメーテールははしたために変装してさる王の宮廷に乳母役で雇われる。もしその身体が人間の倍の大きさだったら最初から疑われて相手にされないだろう。その神々と「巨人」たちは対等に戦うのである。体の大きさによって特化されるのでなかつたら、「巨人」とはなんだっただろうか。

そもそも「ギガントマキア」は「ギガンテス」との戦いで、ギガンテス（単数はガガス）というのがジャイアント、すなわち「巨人」だが、これは大地の女神ガイアの子どもたちで、下半身蛇体の怪物である⁽³⁾。彫刻では上半身の寸法はゼウスたちとかわりがない。ゼウスはこのギガンテスたちと戦う前に、彼を生んだ父親のクロノスらと戦い、さらにチューポンという怪物とも戦った⁽⁴⁾。これが第一世代の神々で、大地女神のガイアもその一人である。これをティーターン（タイタン）族と呼ぶ⁽⁵⁾。日本語に訳せばこれも「巨人族」だが、「ギガンテス」ではない。そしてティーターンといっても、かならずしもゼウスらと寸法がことなつてはいないようで、というのはゼウスをはじめとするオリュンポス神族の第一世代はクロノスとレアから生まれているのである。クロノスの世代とゼウスの世代で体格に違いがでるはずがないのである⁽⁶⁾。そのあと、ゼウスがエウロペやダナエ、あるいはレダといった人間の女とまじわってミノスやヘレネーを生むと、ふつうの人間の寸法になって、世代をくだり、人間の血がはいるにつれて、ちいさくなってくる

のだと考えられないこともないが、天と地は別にして、最初の世代の神々がだから巨大であつたともいえないのである⁽⁷⁾。

なるほどウラノスは星をちりばめた天空そのものであるといひ、これは天と地をおしわけた中国の盤古とおなじく、宇宙的な寸法の「巨人」であると言つてもいいし、その孫にあたるアトラスは天空をささえているから、それと同じ規模のやはり宇宙的巨人である。しかしこれは天空や山の擬人化である。

ただし、このアトラスも、天空の柱そのものではなく、その柱の番人、あるいはそれをつかさどる「神」とされることもあり⁽⁸⁾、つまり、天地海、あるいは日・月などがそれぞれ神で、天の神は天空そのものであるばあいもあるが、これはそれぞれの文化における「神」観念によつてことなる。たとえば太陽神というアポロンは天体としての太陽そのものではなく、その太陽の運行をつかさどるものだし、さらに太陽そのものに近いものではヘリオスがいて、しかし彼も太陽そのものではなく、太陽の馬車をあやつる御者である。アニミスムでは太陽が即、神でなければならぬ。ギリシヤ神話はアニミスム神話ではないので、海の神のオーケアノスもティータン神族だが、海そのものではない。海の神としてはポセイドンもいるが、こちらはあきらかに海底の宮殿に妃のアムピトリュットや、海のニンフたちにかしづかれて君臨する海の王であり、海を支配する人体の神で、海そのものではない。

すなわち日本で筑波山の神と富士の山の神があらそつたといふときは、山そのものを神とみなしているとも思われるが、日光山と赤城山が、というときはそれぞれの山をつかさどる日光

明神と赤城明神が戦うので、山は微動だにしない。さらには三輪山は神のおりたつイワクラであるとされるとともに、大三輪神社の神体であるともいい、蛇体の大物主が住むともいう。はたして山は神そのものなのか、それとも神がおりたつ場所なのか、あるいは神の住まいなのか、それは「神」観念の違いで異なってくる。

オーケアノスの娘の一人が地獄の川ステュクスで、彼女は人体ではまずあらわされず、神々の争いにも饗宴にもくわらわらない。まさに川そのもので、そのばあいは寸法としては川の全長に相当するとすれば数十キロにおよぶだろうが、これを「巨人(ティータン)」とよぶのかどうか微妙である。一般にはガイアがゼウスたちに復讐するために生み出した悪の怪物を「巨人(ギガンテス)」と呼び、それにはたいして秩序をまもる側では断固たる戦いをするのだが、その前のウラノス族については直系の一二格以外はとりたててティータンとは呼んでいない。それに自然神ではなく記憶をつかさどるムネモシユネーなどもウラノスの子だが、彼女はムーサの母親となるように、あきらかに暴力的な自然神とは一線を画している。最初の神がすべて自然神であつたわけでもなかつたし、原初から人格神の性格をもつていたものもいたのである。

たとえば、最初に天と地がうまれ、これは天地そのもので、人体の神ではなかつたとするなら、その天の男根をきりとつて去勢したというのがどういうことになるのかわからなくなる。ウラノスは男根をそなえた人体の神だったのである⁽⁹⁾。自然神話ではたしかに混沌から天地と海と日月が生まれ、やがて動

物と人間があらわれたとする。そのばあいは天地にも日月にも神格はみとめられない。しかしその天地や海山にそれぞれ神格をみとめ、それぞれが交わって子どもとして川や湖を生んだとするなら、天地海山がそのまま「神」になるが、神話として神々に行動をさせるときはそれでは不自由なので、自然そのものと、それぞれに対応する神格を切り離し、海の神が海にやどり、山の神が山にやどるものの、ときにそのやどっている場所をはなれてあるきまわることもできると考える。さらにその分離が進行すれば神は神々の宮殿にいて、所轄の天地海山の領域を遠隔操作することになる。遙任国司のようなものである。さらにはスサノオが海原を統べるようにいわれたのをいやがって根の国に行つたように、任地を選択したり、変更したりすることも原則としてできることになる。神と自然とが分離するのである。ギリシャではポセイドンとハデスとゼウスがそれぞれ海と地獄と地上とをくじで分け合つたのである。しかしそのときもポセイドンにあつた海にはオーケアノスやテティス、あるいは海の老人プロテウスがいたのである。そのテティスやプロテウスもティーターン族ではあるのだが、かならずしも巨人ではなく、海そのものの大きさでも無難ない。ましてやポセイドンはゼウスらとともにオリュンポスの宴に加わるのであり、体格はオリュンポス神族のふつうの寸法である。

人文神は、自然そのものではなく、自然を制御、統括する神で、体躯としてはとくに自然の寸法をもっている必要はない。

ただかつては動物も、人間、あるいは神も巨大であつたという観念があり、たとえば、アニメの『もののけ姫』でもむかし

動物たちは巨大な体躯をしていたといわれる。

北欧の終末神話ラグナレクはヘクラ火山の大爆発に触発された想像であるとされる⁽¹⁰⁾。そこでも神々は「巨人」と戦うのだが、その中で世界を炎でやきつくすスルト巨人こそ、火をふくヘクラ火山であるという。であれば真正正銘の「巨人」である。しかしほかの「巨人神」はどうも人間と同じ寸法のような。こゝでも「巨人」であるということは、神でも人間でもなく、自然の側にいる破壊力をもつたものということのようである。自然の暴力そのものを「巨人」と言っているとも解されるのである。そもそもが北欧の世界のはじめには「霜の巨人」がいて、そこから万物が生まれたとされる。この系列がその後自然の力をあらわしており、そしてその「自然」はけつして恵みを与えてくれるのではなく、厳しい自然そのものなのである。

その延長で、自然の山野を擬人化した大男伝承はどちらかというところ、民間伝承にあらわれる。日本のダイダラボッチであり⁽¹¹⁾、フランスのガルガンチュアである。大人伝承である。巨大な足跡などが、その巨人のものだとされたりする。この「巨人」は本当におおきなものとして想像されたようで、ノートルダム寺院の上に腰掛けたりしている。つまり身長が四〇五〇メートルありそうな大男である。伝承ではもつとてつもない寸法も語られる⁽¹²⁾。

巨人は男ばかりではなく、たとえばフランスではガルガンチュ

アとならぶ国民的ヒロインである蛇女神メリュジーヌも巨人であつたという伝承があり、ヴァアンなどの城を一夜で築いたという伝説を説明して、山から巨大な岩を前掛けに入れて空を飛んできたなどという。それが途中でおちたのが、どこそこの岩山だなどというので、メリュジーヌのほうは、その大岩をエプロンにいれられるほどの大女だということになる。またどこそこの湖や滝は彼女が放尿をしたあとなどともいわれるのはガलगンチュア伝説と同じである。そのほかにメリュジーヌによってノーザンバーランドの山にとじこめられた彼女の父親を巨人が番をしていて、その巨人を打ち倒さなければ父親を解放できないともいえる。彼女の息子のジョフロアがその巨人を打ち倒すのだが、そのばあいは、ほぼ対等な果し合いをしているので、巨人といつてもちよつとした大男というくらいか、あるいはメリュジーヌの一族がみな巨大であつたかだ。ジャン・ダラスの『いとも高貴なるリジュニャン家とメリュジーヌの物語』（一三九四）では、いわゆる「神話的誇大」はあらわれない。あくまで「歴史」と称しているからであろう。したがって、メリュジーヌもその子ジョフロアもふつうの寸法になっているが、本来の民間伝承では、メリュジーヌの一族はガलगンチュアの一族とおなじ巨人なのであり、その民間伝承をもとにしたジャン・ダラスのテクストでもところどころ、巨人伝承の尾ひれが顔をだすのである。

しかし昔話一般で「ちいさこ」がよく出てくるほど大男は出てこない。出てきても名前だけである。祭りなどだと大男、大女のはりぼてを担ぎ出すが、これは儀礼的誇張で、並みの人間

のはずのシャルルマーニュなどを人形にしてもやはり巨大にするのである。南フランスなどではドラゴンの張りぼてがおおいが、ベルギーなどでは祭りごとに地域伝説の大男、大女の張りぼてがかつぎだされ、最後は広場で燃やされる⁽¹³⁾。

昔話ではどんな巨人でも怪獣でも可能だと思われるが、たとえばプルーニユの「巨人カラバルダン」⁽¹⁴⁾という物語では、森で鹿になつていた王女に出会い、結婚の約束をする。鹿王女の城で結婚指輪を鹿の足に当てたとたん魔法がとけて、王女もほかの鹿たちもみな人間にもどる。巨人カラバルダンの魔法から解放されたのだ。しかし、王女はまだ三日三晩、巨人のために髪をすいて、金貨を落とさなければならなかつた。巨人というのは魔法使いだつた。最後に巨人を退治したとき、王女は、「巨人の本に魔法や妖術のことがみんな書いてある」という。この魔法使いが王と王女とその他の人々を魔法で鹿にしていた。その魔法は愛の力でうちやぶつた。これは『美女と野獣』などでもなじみのプロセスだ。「おそろしい接吻」をすると魔法がとけて、大蛇がうつくしい王女になつたりする。しかし、その変身呪法のほかに、王女は巨人に借りがあつた。これはそもそものはじめにながあつたかわからないからなんともいえないが、魔法使いと王女の間の葛藤はそれほど簡単ではなかつたということになる。王女は変身魔法を解除されても、まだ巨人のものなのだ。それを脱するには金貨を大皿に三杯提供しなければならぬ。幸い、王女は金の髪をしていて、それをすくたばに金貨がおちるのである。それを三晩かかつてあつめて差し出せば自由が買い戻せる。それを王子が覗いてしまったために、すべ

てもとの木阿弥になってしまふ。王女は永遠に巨人のものとなる。王子はそこで巨人の城へ行つて、巨人に戦いをいどむ。旅の途中で、ひとりりで敵を成敗する刀といった魔法の宝物を手に入れていたから、相手も巨人でもなんでもないが、巨人の城へついたときは、巨人もその家来たちも、別に巨大な体躯であつたようには描かれない。それより、彼をそこまでつれていってくれた「風」がふつうは巨人か、人食い鬼として描かれる⁽¹⁵⁾。すくなくとも一足で一〇〇里を飛ぶのである。しかし、物語はここでもこの「風」が巨人だとは言っていない。カラバルダンだけが「巨人」といわれるが、体格についての言及はない。むしろ「悪魔」などの同義語として「巨人」といわれているようである。

昔話では人食い鬼がどちらかという大男である。「大男総身に知恵がまわりかね」というような意味での大男で、悪げはないが血のめぐりが少々悪いのである。そのなかの一人がペローの「長靴猫」にでてくる。最後に人食い鬼の城へ行つて、鬼と猫が変身くらべをするのである。もちろん、猫は鬼に鼠になれるかといつて、なれるともといつて鼠になつた鬼を食べてしまふのである。この猫の主人が「カラバス侯爵」という。猫が考え出した名前だが、「巨人カラバルダン」と似た名前である。

ギリシャ神話では天地が生まれたあと、その天地から海、空、(時間)などが生まれ、さらにその次の世代として日月、天の柱、(思考)などが生まれた。自然神であり、あるいは抽象的な観念である。そのなかにゼウスがいたのだが、その兄弟たちはみな

父親に飲み込まれて、のちに吐き出されるといふ「二度の誕生」をしている。そのプロセスによるのかどうか、オリュンポス世代とよぶその世代から体格的にも性格的にも人間にちかづいた人文神がはじまるとされる。彼らが父親の世代のティーターン族に対して戦いをいどんで、覇権を確立し、世界の支配体制をかためる。海についても自然神として生まれたオーケアノスやテーテュス、あるいはネーレウスなどがいるのとは別にポセイドンがいれば行政官として任命される。このティーターンたちとの戦い、ティタノマキアは父親との対決とみられる。メソポタミア以来の天空神の交代と大林太良⁽¹⁶⁾はみるが、「天空神」というより「最高神」あるいは「覇権」の交代と呼ぶほうがふさわしい。天空としてのウラノスはつねにかわらずに天空にいるからである。ゼウスはクロノスによつてタルタロスに幽閉されていたポリュペモスとヘカトンケイルたちを解放して、仲間に入れてクロノス族を制圧し、かれらをタルタロスへ放り込む。ただしクロノスだけは地上へのがれる(あるいは地上へ流される)。ここは物語がはっきりしていない。

そのあともしかしチューポン⁽¹⁷⁾とギガンテスの反乱があり、この後者についてはプロメテウスとヘラクレスの加勢をえて制圧する。これがギガントマキアである。ゼウスは自然の力をあらわす巨人たちを人間との協力と知略により制圧し、オリュンポスの支配体制を官僚制度的にかためた。しかし、自然神である巨人族が一掃されたわけではなく、クロノスを駆逐するときタルタロスから救つたポリュペモスとヘカトンケイルが仲間にはいつている。北欧で巨人のひとりであるロキが神々のなか

に混じっているようなものだ。また、ロキはのちに地底の岩にしばられるが、おなじようにコーカサスの岩にしばられたプロメテウスもいる。北欧ではロキや地底の巨人たちがたちあがってオーデインの覇権をくつがえすのである。ギリシャでも不死の神々はいったんはゼウスに制圧されて岩にしばられ、あるいはタルタロスに幽閉されていても、いつか縛めをとかれてゼウスに立ち向かってくるかもしれない。オーケアノスやネーレウスたちがはたしてポセイダンの威令にしたがうかどうかですら微妙なのである⁽¹⁸⁾。ポセイドンが彼の海神宮にネーレウスたち海の属神を集めて諸国の情勢について報告をうけ、中央の意思やおきてを地方にゆきわたらせるように命をくだしているという場面はいかなる神話にも描かれていない。ポセイドンは人間たちが祭りをすることをもとめ、それにそむけば海の怪物をおくつて懲らしめる。しかし、満潮、干潮、津波や、あるいは魚類など海の住人たちを支配しているようにはみえず、海上の船をくつがえすというはたらきもあまりみられない。

日本では竜宮に竜王がいて、海上をとる船をひきこんだり、海坊主や竜女を海面へおくつて貢物を要求したりするが、海全体を支配している様子はなく、海の一角にいる海賊のようなものでしかない。ポセイドンもそれに近いともみられる。中央から派遣された行政官だから、地方が反乱をおこせば、あわてて中央へ逃げ帰ってくる。ゼウスの支配体制はそのようなもので、役人は派遣し、それぞれの任務につかせたが、天地日月風雨、あるいは動植物の本性については彼の力のおよぶところではない。天地日月が神である時代から、それら自然の事物を制御、

統率するシステムをつくって太陽を担当する大臣のようにしてアポロンを、月を支配する神としてアルテミスを任命し、人文神の官僚体制をつくったときに、自然そのものの擬人化としての自然神大系は終焉し、自然の事物の機能を統率する神々を指名するシステムにかわったが、これは自然の完全な制御にはほどとおく、太陽の馬車が軌道を外れたときには、アポロンにも手のくだしようがなく、ゼウスがおおわててでかけていって彼の雷でいでなんとか馬車の御者をうちおとして秩序を回復しなければならなかった。

「巨人」というのはかならずしも体躯巨大な怪物ということではなく、自然の諸力に属する精霊・悪霊のたぐいとみなすほうが適当である。スラブ圏では「ドラゴン」というのが、かならずしも蛇体ではなく、なみはずれた体力と超自然の變化力をもった自然霊であり、「風」なども「ドラゴン」で、したがって鷲の形のドラゴンなどがいるのである。もちろん、キリスト教化される、そのもともとの自然霊をあらわしたドラゴンにキリスト教のデーモン観が付加され、悪の権化となり、エデンの園の蛇もドラゴンだが、その蛇が人体でやってきて人を誘惑するときもドラゴンとよばれ⁽¹⁹⁾、とくに大地、大気、天空をあれくるう自然の猛威をあらわすものとされる。ギリシャのテイーターン、ギガンテスはそれに近い。その代表がチューポーンで、ガイアの子だが、のちに奇妙な相似から中国語の台風と同一視される。しかしその前から大気中をあれくるう風をあらわしていた。これもしかし人体をとったときはオリュンポスの神々とさしてちがわない体躯であったようで、ゼウスたちとの戦いは熾烈を

きわめた。最終的にはエトナ山の下に閉じ込められるが、ゼウスがエトナをつかんでチューポンの上に投げつけたというところには、本物の巨人たちの戦いの様子もうかがえる。このばあいはゼウスもあまり知恵をはたらかした様子はなく、暴力で暴力にたちむかったようである。ガイアが生み出したものたちには暴力で制圧するというのがゼウスの原則だった。チューポンをオリュンポスに呼んで懐柔したとか、諄々と道理をいってきかせたとか、あるいは取引をしたという話はなく、最初から暴力をもってあばれまわる巨人を有無をいわさず暴力で制圧する。

そのあとのギガンテスたちとの戦いは結局は大地女神ガイアとの代理戦争であったと思われる⁽²⁰⁾。クロノス族がどちらかというと天空や大気中の自然力だったとすると⁽²¹⁾、まず海の神々はそれとは距離をおいていたようであり、また一応ポセイドンが海をとりしきる役をしていた。しかし大地とその奥底については、ゼウスの支配のおよばないところだった。ガイアそのものもゼウスに服するつもりはなかったらう。オリュンポスの神々は、彼らの支配権のおよばない自然の神々に世界の外延をとりまかれていたのである。そのひとつとして大地のガイアとその子どもたちが反旗をひるがえした。たとえば地震や山崩れをひきおこす。ギリシャ神話では地震の神というものは想定されておらず、当然、大地の底にひそむ神々が大地をふるわせるとされていたのだらう⁽²²⁾。

大地はガイアであり、ウラノスとともに最初にうまれた万物の母で⁽²³⁾、ゼウスなどの威令にしたがうつもりは毛頭ない。ゼウスは死の国の支配をハデスにゆだねたが、ギリシャでは死

者の国はかならずしも地下ではなかった。火葬の習慣があり、土葬もあったが、死者がすべて地下へほおむられたわけではなかった。とくに選ばれた死者はエリュシオンの野に赴いたが、これはけつして地下の暗い世界ではなく、陽光のさんさんとふりそそぐ楽園である⁽²⁴⁾。地上と平行か、あるいはそれよりすこし高いところではないかとおもわれる。ハデスの国も地獄の川アケロンをわたってゆくが、パティニールの絵などをみればわかるとおり、この川は茫洋たる大河で、海とも言っているうなものだった。すなわち死の世界は水、ないし海のかなたに想定されていたのである。それにはたいして、地下はガイアの懐であり、さらにその下にタルタロスがあったが、これは神々のうちしたがわぬものをとじこめておく牢獄で、死の国ではなかった⁽²⁵⁾。

そしてこの地下世界についてはゼウスは支配権はおろか想像もおよばなかったのである⁽²⁶⁾。もうひとつ彼には想像がつかなかったのは星のかなたで、星空はウラノスそのものだったが、ウラノスがクロノスの暴力で天たかくおしあげられてからはだれひとりウラノスの領域へいけるものはいなかったのだ。クロノスも星を支配することはできなかったし、ゼウスはなおさらである。雷をもって空をかけるといっても大気圏で、せいぜいオリュンポス山の高さ程度である⁽²⁷⁾。星ははるかにとおかつた。そこで天空も地下も海底もそつとしておいて、地上の世界にだけ秩序をあたえようとした。その地上の世界へ地下や海底の妖怪が顔をだせば大騒ぎになった。それがギガントマキアである。これはのちにアマゾンたちと戦うアマゾマキアやペルシャ

戦争などとおなじ、異種との戦いだつた。

北欧ではそれをラグナレクと呼ぶ。終末の神話とも神々のたそがれとも呼ぶが、別にそれで世界が終わるわけではなく、森林が極相において倒壊し、そこからあらたな樹林が形成されてくるように、破壊のあとには再生があるのである。しかしそこでとくにアース神族にたいしてたちあがってきたものは、フェンリル狼であり、ミッドガルド蛇であり、火の神スルトで、これは火山であろうとされ、現実には大噴火をおこした火山の記憶であろうともされる(ヴァルター・ハンゼン)。また大寒気もふきこんできたという。そこに参加、あるいは指揮した巨人たちはロキであり、爪の船ナグルフアルを操るフリユミルであり、また霜の巨人たちである。冥界の女神ヘルに従者たちというのも巨人であろう。地獄の犬ガルムもヘルの一統であろう。火の国ムスベルというのは火山神スルトに率いられた者たちであろうが、かれらが乗ってくる船はロキがあやつり、ハンゼンによればロキも火の神であるという。なおヘルはロキの娘である。

ここでは狼、蛇、ロキ、火と、「悪」や災いをあらわすものがそろって出てくるが、霜の巨人というのが示唆的である。世界の最初にいた巨人で、オーディンら三兄弟に殺されたはずである。それが復活したにしろ、その子孫であるにしろ、同じものがあらわれることは、要するに終末がまた始まりであることをあらわしている。世界最初の巨人は盤古などとおなじく、世界と同じ巨大さをもっているはずだが、神話のなかではただの人間とおなじ寸法で登場する。ギリシャでも北欧でも「巨人」といわれたものは、自然神としては巨大でありうるが、人格神、

あるいは人文神話の登場人物としてはふつうの大きさで、どちらかという悪をあらわしているとみられる。悪と正義、あるいは混沌と秩序の戦いなのである。この最後の戦いがギリシャやメソポタミア、あるいは聖書の洪水神話と同じ意味をもっているなら、作り直された世界は希望にみちている。たしかに「あたらしい土地」は緑にわきたつて、果物がたわわにみえる理想郷である。

アイスランドの神話とゲルマン神話はアイスランドの神話と大陸ケルトの神話ほどにも異なっている。そして、アイスランドやアイスランドでかなり純粹な形で古い神話がのこされたとする、大陸ではさまざまな要素がまざりあつてどれがケルトで、どれがそれ以前のものかはつきりしなくなっている。しかしピレネには独自の神話がこのされており、ここでは本当の巨人が活躍する。マルリアーヴの『ピレネ神話』⁽²⁸⁾によれば、その巨人たちの筆頭はブラ・ファルガーという名前で、巨大な釣鐘を軽々とかつぐくらいのことはなんでもなかつた。洞穴に棲んでいる一つ目の巨人ベキュはギリシャのポリュペモスであろう。つぎはタルタロで、これもギリシャのタルタロスの主を思わせるが、昔話の主人公としては「タルタロの指輪」としてかなり独自の働きをする。キュクロペスとも性格を共通するところがあるが、鍛冶師でふしぎな指輪をつくるのである。それをはめるとタルタロがやってくる。袋の中に指輪をなげこむとタルタロも袋に飛び込んでつかまってしまう。もつと有名なのはバサ・ジョーナで、山の高いところの洞穴に棲んでいる。巨大な野生人で、全身ふさふさした毛で覆われている。彼にはバサ・

アンデレとよぶ女房がいる。ただし、それほどの巨人ではない。もうひとつ示唆的なのは、『ロランの歌』で有名なロランがピレネの村人の間では巨人となっていて、巨岩を山のでっぺんへ投げ上げて喜んでいたとか、背丈が一五フィートもあったなどという。(マルリアーヴ、六一頁)

一般にヨーロッパの神話伝承で言う「巨人」は異界のものであっても、体格が巨大であるとはかぎらない。ジェアンとかジャイアントという言葉が「妖精」とか「妖魔」と同義に使われているばあい、異様なものであれば「ジェアン」と言われた。「小人」が地下に住んで、金属加工や鉱物採取をしているとされるが、この小人族から巨人が生まれることもある。要するに普通の人間とは違うというだけである。

神々を造形的にあらわすのに、普通の人間より巨大に表すのは、「神」という徴をあたえるためで、実際に巨大であるとはかぎらない。

もうひとつは、かつて本当におおきな巨人族がいたのが、その種族がだんだん退化してふつうの人間の寸法になったともいう。ネルヴァルが言っているのはそれで、気候変動、寒冷化、大洪水などによって地上の神も精霊も人間もみな矮小化したという。恐竜の化石などをみて先史時代はみな巨大であったとおもうときは、「退化」したのだと考える。もつともその恐竜たちが跋扈していた時代は地上では残忍な殺し合いがたえまなく行われていたと彼は考えていた²⁹。

ラグナレクでは、「退化」した種族がすべてほろんで、あたらしい種族が現れる。しかし、大洪水のときは、それまで生き

ていたもののうち、選ばれたものだけが生き残ってあらたな生命を誕生させる。そしてネルヴァルが依拠した古代の世界についての想像では、大洪水のときに、天空の神々に反抗した精霊たちがピラミッドの中に隠れ、洪水がおさまってから地上に出てみたが、地上は洪水のあとの泥土が腐った空気を発して、ピラミッドの中で生き延びたものたちも、その毒気で健康をそこね、そこから生まれたあたらしい世代はみな青ざめた病身のひよわなものたちになったという³⁰。野生人がたくましい巨人で、文明人がひよわなあおぞめたインテリであるというロマン主義的な末世観があったのだろう。地上にはかつて神々の時代があり、黄金時代があった。つい最近でも太陽王の栄華の時代があり、あるいはナポレオンが世界に覇をとらえた栄光の時代があった。それになりたいして、その祭りがおわったあとにうまれた世代のものたちには、もはや栄光も勲もありえず、灰色の現実がまつているだけだという観念である。大革命はナポレオンのあとにはすぐに王制復古となり、なしくずしに民衆の理想はふみにじられた。一八三〇年にはもういちど、その理想を実現しようと、若者が街にでて、いつときは勝利をかちとった。しかし「栄光」のときはみじかかった。三日後には、既存勢力との妥協によるブルジョワ政府ができ、王が「民衆の王」などという欺瞞的な名前で復帰した。これを「栄光の三日」といい、バスチーユ広場には、一七八九年の大革命の記念碑のかわりに、この一八三〇年の青年たちの幻滅の記念碑が七月の三日の日付を刻して建っている。要するにかれらは「遅れてきた青年たち」だった。かがやかしいこと、壮大なことはかれらには無縁だった。

皇帝とともにヨーロッパを駆けめぐったかれらの父親たちは、いま失意の傷痕軍人として暖炉ばたにうずくまっている。その子どもは世代はすばらしいものはなにもなく、パリにはくらい雲が垂れ込め、つめたい風がふきすさぶ。人はみな背をかがめて地面に目をおとして家路をいそいでいる。かつての英雄たちのように昂然とかしらあげ、理想をかかげてヨーロッパを駆けめぐったおもかげはない。巨人の時代がおわって、でくの坊の時代がきたのである。

あたらしい時代はもちろんキリスト教の時代だった。キリスト教、あるいは聖書でも、ゴリアテなど、異教徒たちを巨人としてあらわす例がすくなくない。かれらはエホバに戦いをいどみ、貪欲な食欲であらゆるものをむさぼりくう。そこで神がこれを抹殺する（ルクトウ）。ドイツでは「森の猿」(Walaffe)という言い方をされることもある。ロテル王の叙事詩で出てくるヴィドルトという巨人は怒りくるって盾にかみついて火花をほとばしりださせる。まるで熊戦士ベルセルクルである。かれらは獣の皮をまとい、動物のような叫び声をあげる。中世の北欧では民間伝承の巨人でトロールがいる。この巨人たちは魔法をつかい、変身ができる。六本腕、八本腕ということもある。

ストーンヘンジなどの巨石遺構は巨人の仕業だともいわれる。神が巨人をつくったのは、ドラゴンと戦わせるためだったと *Heiden Buch* にあ³⁰。

中世の騎士物語でも巨人は悪の権化として出てくる。棍棒をもった野生人のように描かれることもあるが、キリストの教え

に服さない山賊のかしらのように描かれることもある³¹。体格的には大男であつても人間の範疇をこえるわけではない。キリスト教の騎士たちが対決した異種としてはサラセン人と呼んだイスラム教徒もいた³²。昔話では悪魔、サラセン人、魔法使い、巨人、そして地域によつてはドラゴンがほとんど同じだった。おおむね血のめぐりがわるいとされるが、サラセン人のばあいは魔法をつかうとされており、けつして「おろか」というわけではなかった。体がおおきいほかに色が黒いとされることがおおかった。これはアラビアの物語でもジンというのがおおむね大男で、それも黒い肌をしていることがおおいのと対応しているかもしれない。このあたりへくると、もはや自然の力をあらわした自然神ではなくなってくる。異種、異教徒である。そしてその異族なる「巨人」にたいしては「容赦ない残忍さ」が発揮されたのである。これは騎士道物語でも同じで、騎士たちは騎士道にのつとつて相手を尊重しながら礼儀ただししい戦いをし、倒れたものに止めをさすようなことはしかなかったが、「巨人」が相手だと容赦はなかった。その「巨人」は異族だったのである。同族集団は異族を撃退するために暴力にたよった。言葉も通じないし、そもそも森を出てから、すべてのものが敵だった。見知らぬものがやってくれば夷敵の襲撃だと思った。異類同士であいがただちに殺し合い、戦争になったのは、ケンタウロス族とラピテウス族の戦いでも描かれる。自然に対抗して戦う人間は同類と連携・協同して力を増すかわりに、その同類をものいわぬ自然の諸力とおなじにみなして、問答無用で打ちかかったのである。自然の中でもっとも弱い一本の葦である人

間は武器を手にして自然と動物たちの主になったつもりでいた。彼にはおなじ様子をして、やはり自然の主であると称している同類が気にいらなかった。その似たもの同士をみかけると、反射的に武器をふりあげ、残忍な戦に突入した。人間の神話はギガントマキアではじまりラグナレクで終わるなら、それは戦争で始まり戦争でおわる神話だった。巨人時代というのが、神話の太古の時代であるなら、それは絶えざる戦の時代だった。

註

(1) 大林太良は『神話の話』(講談社、一九七九年)のなかで、巨人神話は巨人の死の神話であり、世界巨人が死んで天地万物をその死体から創造するのだという。本論では世界創造についてはこの見地を取らない。

(2) もつとも有名なものがベルガモンの神殿の大祭壇壁面浮き彫りである。ベルガモン人の異邦の民(ガラテア人)に対する戦いをギガントマキアになぞらえて描いたとされる(『人類の美術・ギリシャ・アルカイック』新潮社、一九七〇年)。現在はドイツのベルリン国立博物館にうつされている。ここでは蛇がギガントスの仲間として描かれているが、かならずしもギガントスたちが蛇の下半身をもっているようにはみえない。『人類の美術』(シャルボノー)では、巨人たちの足がそれぞれ蛇になりその先に蛇のあたまがついているのだと説明するが、破損がはなはだしく、はつきりそう断定できない。下半身が明らかに蛇になっているものもあるが、そのばあいは蛇の尻尾でおわっていて、アテネの盾にかみついている蛇は巨人たちとは別だともみられるのである。なお、その戦いの様子をシャルボノーは「氏族同士の決戦につきものの容赦ない残忍さ」と表現する。ギリシャでも戦士の名譽がたつとばれ、地にたおれた敵は殺

さないといった規則があったが、たしかにここではそのような手加減はみられない。氏族同士というより、むしろ異族との戦いでの残忍さではないだろうか。アマゾンとの戦いでも倒れたペンテシレイアに止めをさすのは、戦士の礼儀にはそむいている。デルポイのシフリス人の宝庫ではギガントスたちは蛇身では描かれていない。

(3) ギガントスの描写では剛力で、おそろしい様子をしており、髪の毛がさかだつており(鬣がはえているということもある)下半身が蛇である。かれらの中にはアルキュオネーのように母なる大地にふれるたびに力を回復し、不死であるというものもいて(Grimal)、これは後にポセイドンとガイアの間にもまれるアンタイオスとも共通する性格である。

(4) アポロドーロスではギガントマキアの後でガイアが復讐のためにチュエポンを生んだとされる。ヘシオドスではティタノマキアのとチュエポエウスが生まれる。

(5) Grimal (Dictionnaire de la Mythologie grecque et romaine, PUF, 1951) はヘシオドスにしたがつて、ティータンをオーケアノスからクロノスまでの六格、ティータン女神をテチュス、レア以下のやはり六格とし、ヘカトンケイルとキュクロペスの六格は別格としている。しかしこのティータンから生まれた神々がやはり一二格いるし、水神ポントスとガイアの間にもうまれた子とその系列も広義のティータンとみなされる。のちにデオニュソスを細切れにして料理してたべてしまったのもティータンたちとされており、これはもはや名無しの山野の精霊のようである。

(6) ただし、ゴヤの「わが子をくらうサトゥルヌス」を思い浮かべることもできる。画家の想像ではクロノス⇨サトゥルヌスは山々のうえに上半身をあらわした巨人としてあらわされる。

(7) それに最初の巨人族(ティータン)が神々であったというたしかな証拠

もない。混沌から天と地がうまれたとしても、それが「神」であったかどうか疑問だし、大地ガイアがうみだしたギガンテスたちは機能、役割のはっきりしない怪物たちである。

(8) このばあいの「神」がはたして「神」かどうかやはり疑問であろう。オリュンポスの神々はたとえトロイ戦争のときなど地上の出来事に介入するし、怪物を送って人をこらしめたり、人が犠牲を捧げて祈ればそれなりの神慮をしめしたりもする。しかしアトラスがトロイの戦場へあらわれたというのではないし、アトラスに人が犠牲をささげてなにごとかを祈るということもない。ちなみにアトラスはのちに彼の名前をとってよばれるようになるアトラス山と同一視される。また、もともとは自由にうごまわる神で、ギガントマキアにおいてはギガンテス側でたまたまかたが、戦い終わって、ゼウスによって天の柱にしばりつけられてしまったともいう。

(9) ウラノスは男根をそなえた人体の神としてガイアとまじわったが、クロノスによって去勢されると、人体を捨てて、天空にしりぞいて、物質としての天空になってしまう。神ではなく自然になると見られる。人間の姿の神としては殺されたのである。

(10) ヴァルター・ハンゼン『アスガルドの秘密』東海大学出版会、二〇〇四年。
 (11) ダイダラボッチ伝承は東京の代田などにみられるように東国の伝承だが、大男伝承はどこにでもある。なお、「ものけ姫」で森の神「しし神」を「デイダラボッチ」と呼んでいる。桜井徳太郎編『民間伝承辞典』東京堂では「天地創造の神だった」（宮田登）とする。また柴田弘武は「ダイダラボッチはタタラ男」とする（『風と火の古代史』彩流社、一九九二年）
 (12) アルプスやピレネーの山岳地帯では山中に巨人が住んでいるという伝承がおおく、きびしい自然のなかでは普通の人間は住むことができないか

わりに、巨人や小人がいると想像されたものであるが、また、キリスト教によって教化される以前の未開社会では巨人が大手をふって生きていたという想像もあり、山の中にはキリスト教、あるいは文明がたわらず、未開の野蛮な人間が生息していたとも想像されていたよう、「雪男」などにもつらなるところだろう。

(13) Le Carnaval traditionnel en Wallonie, Ville de Binche, 1962. ビカルディではガヤン、フランドルではルーズなどと呼ぶ。ゴリアテと呼ぶ土地もある。いずれも夫婦であらわされ、カーニヴァルに登場する。

(14) 拙訳『不思議な愛の物語』（ちくま文庫）

(15) 同書におさめた「粉やと鷺鳥の物語」では、主人公がいなくなった女房をさがしににかけて、「風のおっかあ」のところで、大男の子どもたちに会い、一緒に風の中へ飛んでゆく。「風のおっかあ」はふつう三人の巨人の息子をもっていて、それぞれ、北風、東風、南風などである。これが人間をみると取って食おうとする。人食いの巨人である。風を擬人化した神話の名残であろう。「風のおっかあ」については拙著『空と海の神話学』二〇〇八年参照。

(16) 大林太良ほか『世界の神話をどう読むか』青土社、一九九八年。

(17) ギガンテスたちが打ち破られたのでガイアが憤って、復讐のためにタルタロスとまじわって怪物チューポンを生んだとも言う。いずれにしてもウラノス族との戦いのあとは、ガイアの子たちとの戦いだった。ウラノスの子もガイアが産んだのだが、ギガンテスやチューポンはガイアが一人で生んだともいい、或いはタルタロスとの間といっても、大地の一部がタルタロスだから、自己性愛のようなものだった。ギガンテスもウラノスの血がしたたつてガイアをはらませたというが、これもガイアが一人で生んだといつてもよかつただろう。すなわち、ゼウスは天空の子た

ちとの戦いのあとで大地の子たちと戦ったのである。ガイアはほかに水神ポントスとの間に海神たちを生んだ（アポロドーロス）が、これはゼウスと覇権をあらそうことはしなかった。ちなみにチューポンは頭が星空にとどくほどの巨人であったという（カトリリーヌ・サレス Catherine Salles, *La mythologie grecque et romaine*, Hachette, 2003）

- (18) ただしオーケアノスはクロノスの側につくことを拒否していた (Grimal)
 (19) 北欧の巨人たちもキリスト教化してデーモンになっていったという（ルクトウ）。

(20) 大地母神のガイアが自身凶暴な女神で、その暴力をギガンテスやチューポンといった子どもたちがあらわしているともみられる。地震や噴火をおこす大地の暴力と、死と再生の女神としての飲み込むものの恐ろしさを本来、女神がもっている。暴力のもととしての女神については拙論「暴力神の系譜」『暴力の発生と連鎖』人文書院、二〇〇八年参照。

(21) Pierre Grimal *Récits et légendes de l'Olympe*, Larousse, 2008 は、「ウラノスの子はオーケアノス以外はおおむね空の性格をもった日月などである」と見る。

(22) ホメロスではポセイドンが地震をひきおこす神という表現をされるが、自然現象のものは単一ではなかったらうし、また解釈はさまざまであった。

(23) あるいはガイアが最初にうまれてウラノスを産んだともいう。

(24) 北欧では戦場でたおれた戦士は天空の城ヴァルハラに導かれた。これも高みにある死者の国である。

(25) ただし解釈はさまざまで、ヘシオドスではハデスは「地の下の死者」を支配するといひ、ハデスはタルタロスの「もつとむこうに」あるとされる。これは土葬と火葬の習俗のちがいにしよう。ギリシャでも時代によつ

て、また地域によつて土葬あるいは火葬だった。アテナイの英雄がはなばなしく戦場で死ぬときは火葬だったが、田舎の人や庶民は土葬だった。もつともティーターンとの戦いに際してタルタロスからヘカトンケイルらを救い出したが、これは大地母神ガイアの示唆によるもので、たぶんタルタロスの番人カムペを殺す手引きをしたのだから。その後、ティーターンたちをタルタロスへ幽閉したときは、そのヘカトンケイルに番をさせることにした。つまり、ゼウスの支配権はタルタロスの入り口の戸締りにかぎられていたようだ。

(27) ホメロスではゼウスの枕詞として「群雲をかきよせる」という表現がされる。かなり低空の雲間に住まう神である。

(28) Marilave, Olivier, et Pertuzé, Jean Claude, *Pantheon Pyreneen*, Loubatere, 1990

(29) 『オーレリア』のなかの想像で、怪獣やドラゴンたちが食い合い、殺しあっている古代の夢がえがかれる。

(30) ネルヴァル「ピラミッド」『東方の旅』
 (31) Perceval が戦う *Orgueilleux de la Lande* などはその典型であろうが、かならずしも「巨人」とはいわれない。

(32) 『ロランの歌』でも形成不利とみたサラセン人たちが「アラビアの巨人」の助勢をたのもうと言う。

(しのだちわき・比較文学／ヨーロッパ神話研究)